

『シュトゥットガルト詩篇』挿絵における絵画化のモード — 『シュトゥットガルト詩篇』研究 (その2) —

鼓 みどり

(2001年10月22日受理)

On the Mode of the Visualization of the Stuttgart Psalter Illustration (Studies on the Stuttgart Psalter II)

Midori TSUZUMI

midori@edu.toyama-u.ac.jp

Abstract

The Stuttgart Psalter (Stuttgart, Württembergische Landesbibliothek, Bibl. Fol. 23, here after S) is one of the most prominent Psalter illustrations in Early Medieval West. Its wide range of images is often used as visual reference of medieval world. However, its character, i.e. 'literal illustration' or 'literalism' has not been analyzed enough. This paper looks into S's word - image system as 1) visualization of phrase, 2) visualization of sentence, 3) visualization with association, 4) visualization with cliché, 5) images of the Old and the New Testaments. We shall clarify the mode of visualization of the Stuttgart Psalter in comparison with the Utrecht Psalter (Utrecht, Bibliothek der Rijksuniversiteit, cod. Bibl. Rhenotriactinae I, Nr.32).

キーワード：中世美術，カロリング朝，写本挿絵，シュトゥットガルト詩篇，
ユトレヒト詩篇，リテラリズム

はじめに

詩篇本文を絵画化するテクスチュアルな詩篇挿絵は、中世写本彩飾史に興味深い事例をもたらした。『シュトゥットガルト詩篇』（シュトゥットガルト、ヴェルテンベルグ州立図書館，Bibl. fol.23，以下S）は、820～36年頃、おそらくパリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院で制作された¹。テキスト欄とはほぼ同じ巾の挿絵が段落の間に挿入され、後に続く章句を視覚化している。ほぼ同時代の『ユトレヒト詩篇』（ユトレヒト，大学図書館，

ms. Rhenotriactinae I, Nr.32，以下U）は、各篇冒頭に1点の見出し挿絵を配して、個々の章句を反映するモチーフが相互に結びつきながら挿絵を造り上げていた²。Sはむしろ1つないしは限られた数の章句を反映した挿絵を成立させている。

Sは1968年のファクシミリの刊行後、モノグラフは殆ど発表されていない。近年、3つの研究がUと比較しつつSに言及している。1994年に、リーシュがUとSの弓の表現を手がかりに、フランク族とカロリング朝の弓矢を分類、復元している³。技術史上、9世紀頃に異素材を組み合わせた複合

弓が、アラブ世界から西欧にもたらされた。SやUの戦闘場面に頻繁に描かれた複合弓は、この技術史上の転換を物語る視覚資料と見なされた。また異民族の表象として、アラブを喚起させる複合弓が用いられたという指摘は興味深い。

1997年に辻佐保子氏はテクスチュアな詩篇挿絵に登場する偶像表現を分析し、欄間に挿入されているS挿絵の偶像は、Uほど複雑なモチーフ間の呼応関係を成立させられないことを指摘した⁴。この論考の主眼は、偶像表現がいかなる章句に拠っているか、Uと他の詩篇挿絵の章句選択がいかに異なるか、であった。偶像の倒壊をうたった9篇36節が、S(f.12r)では悪人の腕を折るキリストに対応していることを指摘し、この章句が偶像の懲罰であることを示した。

1999年にトラヴィスは、18篇6節「勇士/巨人が喜び勇んで道を走るように」の絵画化に着目し、異教や旧約でネガティブな意味を持つのが一般的であった巨人とキリストが結びつく過程を分析した⁵。Sではテキスト本文がローマ版の“ut gigas”を採っているのに、挿絵はヘブライ版“ut fortis”に基づく勇者を描いている。トラヴィスは槍と盾を持ち甲冑で武装したこの勇者が、美德Fortitudo(堅忍)の擬人像との類似から、キリストの象徴であると推論している。

このようにSの特質は、トピックに応じて部分的に紹介される機会はあるとしても、議論の中心に据えられることはないに等しかった。本稿ではSの絵画化のモードを分析し、この詩篇写本の独自性を浮彫にするとともに、そこに現れる西欧詩篇挿絵の「リテラリズム」の一つのあり方を確認したい。

1 語句と文脈の絵画化

Sの絵画化全般の傾向を探るために、すでに筆者がUの分析で行ったのと同様の方法をまず採用した⁶。しかしUに比べ、各語群の事例が少ないため、より大きなカテゴリーに統合して検討した。まず抽象的な観念と具体的な事象に大別し、前者をさらに正義(信仰, 神, 宗教的世界)と悪(悪人, 罰, 破壊, 戦闘)、後者を自然(動物, 植物,

宇宙)と人工物の4つに分けた。言葉とモチーフの照応関係を分析する尺度として、①語句の絵画化、②文脈の絵画化、③連想を介在させた絵画化、④定型表現(クリシェ)による絵画化、の4つを用いた⁷。ただしSはUに比べ、④のうち旧約・新約場面を充てた絵画化が目立つので、単純な定型表現と別個に検討する。また擬人像を用いた絵画化と比喩的言い回しの絵画化については、すでに1990年に分析したので、今回は取り上げない。

語句の絵画化は、非常に例が少なく、正義(15)、悪(1)、自然(14)、人工物(2)である。「正義」は、キリストなど属性を明らかにするモチーフを伴った集団として表現される。たとえば28篇2節(f.35r)や36篇25、26節(f.47r)で、人々がキリストや神の手を礼拝している⁸。86篇5節「この人もかの人もこの都(シオン)で生まれた、と」に対し、城壁の中に裸の2人物が立っている。彼らが裸体である理由は、述語「生まれた」に関連するのだろうか⁹。「自然」14例のうち6例は森羅万象を列挙した148篇の章句である。このように語句の絵画化は、テキストに即した事象を単純に充てる傾向が認められる。Uにさかんに登場した「パターン・モチーフ」や「類語モチーフ」すなわち語句のニュアンスや個性を捨象して絵画化する記号的モチーフは、Sの語句の絵画化には見出されない¹⁰。

文脈、すなわち主語と動詞を絵画化した事例は、いずれのカテゴリーでも多数見いだされる。「正義」(63)は、祈り(12)、救済(18)、讃美(25)、その他(8)に分類できる。祈りは詩篇テキストに繰り返し登場する定型句であり、78篇9節「救いの神よ、私たちを助けて下さい」に基き祈る信徒たち(f.95v)¹¹のように、詩篇作者や群衆が祈る場面に対応する。救済は、21篇28節「すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り」を反映したキリストを礼拝する諸国民(f.28r)¹²のように、キリスト自身の行為、祝福その他を行う神の手によって表現されている。讃美は、80篇3節「ほめ歌え、太鼓を打ちならし、琴を、豎琴を美しく奏でよ」をあらわす歌い手と楽士たち(f.97v上)¹³のように、歌や楽器など、テキストに含まれた音楽的要

素を積極的にすくい取って絵画化している。その他のタイプとして44篇4節「勇士よ、腰に剣を帯びよ」に対し、キリストが剣を腰に差して立つ(f.57r)¹⁴。149篇9節「定められた裁きをする」は、判決を記録する書記の姿によって反映されている(f.163r)¹⁵。このように「正義」は、大半がやや型にはまった表現であり、テキスト自体の単調さと共通する。

「悪」(24)は、敵の優位(15)、敵の敗北(8)に大別され、反映された動詞の性格によって傾向が決まっている。悪人は36篇32節「主に逆らう者は待ちかまえて」(f.47v)¹⁶のように槍や剣などで武装し、義人や詩篇作者を脅かすか、17篇39節「彼らを打ち、再び立つことを許さない」(f.21v)¹⁷のように敗北し、或いは混乱して逃走する。悪や罪を具現するモチーフの大半は、Uと同様武装する兵士である。しかし49篇18節「姦淫を行う者の仲間になる」による抱擁する男女(f.63r上)¹⁸のように、Sのみに見出されるエロティックな場面も罪の表象である。これについては、次章で取り上げる。

自然のカテゴリーで文脈を絵画化したモチーフ(15)は、動物や自然現象に触れた章句を絵画化している。たとえば62篇11節「剣にかかり、狐の餌食となりますように」を反映し、悪人が刺し殺されて狐に食われている(f.74r下)¹⁹。このカテゴリーの語群は関連性が高いので、水のほとりに集まる動物の描写が、103篇10-11節をひとつの景観として視覚化している(f.117r)²⁰。時に章句に密着するあまり、現実離れた状況が描き出されることもある。21篇13節「雄牛が群がって私を囲み」に対し、2頭の牛が聖人を挟み撃ちにしている(f.26r)。同篇17節「犬どもが私を取り囲み」は、3匹の犬に囲まれ、足や腰を噛まれた詩篇作者によって絵画化されている(f.26v)²¹。2つの章句はU(f.12r)にも絵画化されているが、1篇1見出し挿絵なので、牛群と犬がささやかに添えられ、さほどの違和感はない。ところがSでは、2つの章句が別の段落挿絵として扱われているので、牛も犬もかなり強調された姿で登場している。

人工物(22)は、誰の行為と関わるかによって意味が決定される。特に武器(13)は、10篇3節

「主に逆らう者が弓を張り、弦に矢をつがえ」に基づき弓を引き絞る悪人(f.12v²²)のように、悪の表象となる場合と、45篇10節「地の果てまで戦いを絶ち、弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる」(f.59r上)²³や75篇4節「神は弓と火の矢を砕き、盾と剣を、そして戦いを砕かれる」(f.88r, 図1)²⁴を絵画化した武器の破壊、すなわち戦争の終結を象徴する場合がある。75篇は稚拙で状態も良くないが、小さな挿絵スペースに、角笛、剣、弓矢、兜、鎖帷子、槍、盾などが散乱し、人物は一切登場しない。この放置された武具は、古代ローマ戦勝記念美術にしばしば登場した武器飾りと同じように、戦闘の終結を意味している。Uとは対照的に、古代美術の伝統とは無縁に思われるSであるが、この例は古代伝統との関連を強く示唆している。68篇13節「町の門に坐る人々は私を非難し、強い酒に酔う者らは私のことを歌います」は、門前で酒を飲む男に呼応している(f.79v)²⁵。この男は右から近づく詩篇作者を嘲笑すると思われるだろう。

文脈の絵画化を概観すると、Sは絵画化する章句に対し、ある程度限られた内容の挿絵を充てている。段落式挿絵の制約があるのはもちろんであるが、テキストの絵画化のスタンス自体、微妙なニュアンスを捨象して明快なイメージを対応させる傾向が認められる。これはUの「イディオム・モチーフ」²⁶と似ているが、Uの場合、章句とモチーフの対応をある程度固定化させて、挿絵から章句を見つけださせる工夫が認められた。しかしSの段落式挿絵は、そのような工夫をさほど必要としないように思われる。

2 連想を介した絵画化

連想を介した絵画化は、言葉が喚起するイメージの意外性、イメージを引き寄せる発想の飛躍を楽しむことが出来る。Sの持つややアナキーな性格がよく現れた領域である。「正義」(41)は、神の手(22)、キリストと人間(16)、その他(3)に分類できる。54篇10節「主よ、彼らを絶やして下さい。彼らの舌は分裂を引き起こしています」に対し、画面右側で槍を持つ神の手が、1人の男

をうち倒している(f.67r)²⁷。男の顎を突く槍は、「舌を」と関連するかもしれない。118篇23節「地位のある人々が座に就き」は、弟子を連れたキリストが3人の王に出会う場面に対応している(f.134r上)²⁸。いずれも神やキリストを定型的に表現しながら、定型におさまらない要素を持っている。

神の手は人間の祈りを聞き祝福を与えるのが一般的であるが、Sでは巻物をひろげて教示し(118篇1節)²⁹、時には既に見たように天使を介さず直接懲罰を与えている。Uにも武器を渡す神の手は見られたが、これほど直接地上に介入する行為は認められない³⁰。Sの神の手は天使を伴っていないことも、表現の差異につながっている。また89篇8節や114篇2節には雲の間から顔を覗かせるキリスト或いは神が描かれ、直接の対話を強調する意図が伺われる³¹。

有名な章句である109篇1節「わたしの右側に就くがよい。」は、同型のキリストが2人、各自8字型マンドラに坐して並ぶ(f.127v)³²。向かって左側のキリストがひどく損傷しているのは、この図像の意味を誤解した改竄によるものであろう。このキリストの足下には、敵が1人踏みつけられている(2節「敵をあなたの足台にしよう」)。Uに描かれた玉座を共有する父子同型の神格表現はひとつの図像伝統へと発展したが³³、Sの場合は章句以外のニュアンスを排した簡略さが可能性を閉ざしたと考えられる。

「悪」(29)は、悪人の暴力(14)、悪人の懲罰(11)、罪(4)に分類できる。暴力は118篇87節「この地で人々は私を絶え果てさせようとしています」に基づいた戦士に踏みつけられる詩篇作者(137v下)³⁴のような暴力の被害、4篇5節「おのいて罪を離れよ」を示す2人の男の喧嘩(f.4v)³⁵、そして139篇6節「傲慢な者が私に畏を仕掛け」に基づき足に綱をかけられた預言者(f.155r下)³⁶などバラエティがある。畏のモチーフは139篇の続きとも考えられる140篇10節「主に逆らう者が皆、主の網にかかり」の巨大な網(f.156r)³⁷や56篇7節「彼らは私の足下に綱を仕掛け、その中に落ち込んだのは彼ら自身でした」で多数の悪人が真逆様に落ちる陥穽(f.69r)³⁸が示すように、悪人の懲罰の場に反転しうる両義性を備えている。

悪人の懲罰はこの畏以外に、134篇10節「主は多くの国を撃ち、強大な王を倒された」をあらわす諸王を倒す武装した天使(f.150v上)³⁹のように、神の手や天使が武力を発揮する情景にも対応する。これは既に見た「正義」の行為する神の手と共通している。

罪をあらわすもう一つの表象は、先章でも触れたエロティックな場面である。51篇3節「なぜ悪事を誇るのか」は、場面右側の裸体の男女に呼応する(f.64v、図2)⁴⁰。場面左側にダヴィデの命を狙うサウルとドエグが描かれているので、武力表現の必然性は薄い。また男女の仕草や表情から、この場面は明らかに性的暴力と見なすことができる。他のエロティックな場面とは峻別されるこの描写から、性的暴力の犯罪性のある程度意識していた可能性が示唆される⁴¹。その他の事例のうち118篇53節「律法を捨て去る者」は抱擁する着衣の男女に対応し、律法で禁じられた姦淫ないしは不倫を表象するのであろう(f.135v)⁴²。しかし72篇27節「あなたを遠ざかる者は滅びる」は、エロティックな場面が描かれたと見られる挿絵全体がこすり取られており、詳細を確認できない(f.86r)⁴³。77篇66節「とこしえに嘲られる者」に対し、腫れ物に苦しめられる裸の男たちが描かれている(f.94v下、図3)。ミュートリッヒらは、この場面をサミュエル記上5章の契約の櫃がペリシテ人にもたらした腫れ物の蔓延と見なした⁴⁴。この文脈で考えると、神の懲罰のひとつであり、旧約場面と見なす方が妥当かもしれない。しかしタゴン神殿や契約の櫃などサミュエル記の文脈は一切描かれず、下半身をさいなむ腫れ物だけが突出した描写の意図には、より現実的な警告のニュアンスを読みとることもできるのではないだろうか。疾病表現の視点から比較例を探す作業が必要なのは言うまでもない。

「自然」(7)には特筆すべき事例が見出されない。語群が具体的で、連想を介在させる余地が乏しいと考えられる。8篇8節「御手によって作られたるものをすべて治めるように」は、キリストと人間の周囲に様々な動物や鳥が集い、「動物に命名するアダム」を思わせる(f.9r)⁴⁵。107篇3節「目覚めよ、豎琴よ、私は曙を呼び覚まそう」

は、他の事例と同じように門前でキタラを弾くダヴィデが描かれている (f.125r)⁴⁶。曙という時間そのものは絵画化されていないが、楽器から音を想像することが出来るだろう。

人工物 (19) は、言及された事物と何を結び付けるかによって、時には意外な展開が生まれる。また分かりづらい言い回しに具体的な事物を当てはめて絵画化する事例もある。131篇17節「私が油を注いだもののために一つの灯火を備える」には、キリスト (christus=受膏者) にランプを捧げる男が描かれている (f.149r)⁴⁷。14篇5節「金を貸しても利息を取らず」は、キリストに寄進する男に対応している (f.16r)⁴⁸。利潤を求めないことが、利潤を教会へ寄進する行為に転じられている。55篇7節「彼らは隠れて私の踵を狙う」に対し、右上に跪くヴェールをかぶった女性の踵を、中央の2人の男が狙っている (f.69r, 図4)⁴⁹。これもすでに述べたエロティック表現の一つであろう。この女性を詩篇作者の魂と考えれば、彼の陥った危機的状況がわかりやすくなるだろう。

連想を介在させた絵画化は、既存の図像体系に整理できない表現を生み出すが、Sの場合は、次章で見るようにUよりも旧約・新約図像を積極的に用いている。詩篇の章句から特定のエピソードを喚起させる意図を優先すれば、史伝的に解釈できない曖昧な表現は自然に後退するであろう。また史伝を離れた教訓的メッセージも目に付く。一連のエロティックなイメージや寄進を促す場面は、この詩篇を誰が見たのか、或いは誰に見せようと思図したのかという問題を考える際、看過できないだろう。

3 定型に拠る絵画化および旧約と新約の主題

定型による絵画化の例は「正義」(13)、「悪」(7)、「自然」(10)、「人工物」(3)である。「正義」は「栄光のキリスト」のような定型表現が目立ち、17篇11節「ケルブを駆りて飛び、風の翼に乗って行かれる」は、2人の天使を伴ったキリストが、2人のケルビムの上に位置する玉座に坐している (f.19v)⁵⁰。左右相称の構図の中心に君臨するキリ

ストは、アプシスなどモニュメンタルな装飾を喚起させるほど端正に描かれている。「悪」は殆どが悪魔や地獄に呼応する。9篇18節「神に逆らう者、神を忘れる者、異邦の民はことごとく陰府に退き」は、罪人を引き立てる悪魔に対応している (f.10v)⁵¹。また20篇9節「あなたの御手は敵のすべてに及び、彼らは燃える炉に投げ込まれた者となり」に対し、天地3カ所に現れた巨大な神の手が、炉の中の罪人たちを焼いている (f.25r)⁵²。神の怒りのすさまじさが、入念な火炎表現に現れている。「自然」はさほど目立った事例がないが、22篇4節「死の陰りの谷を行くときも」を反映して、画面右下の木の幹に蛇が巻き付き、中央のキリストを密かに伺っている (f.28v)⁵³。「死」から蛇が喚起されたのは、単なる連想を超えた図像伝統に拠るだろう。「人工物」の中で143篇「私の手に戦うすべを、指に戦するすべを教え」は、この詩篇の主人公であるダヴィデと武器を持つ人々に対応している (f.158r)⁵⁴。後者は敵と言うよりは、単に戦闘をあらわすものと思われる。定型表現による絵画化は、章句の細部を捨象して型にはまったイメージに置き換える操作である。しかしSの場合、絵画化する章句を絞り込むことが可能なので、絵画化しづらいテキストにあえてイメージを結び付ける必然性が低い。その結果、定型表現の事例が少ないのであろう。

もう一つの特徴として、SはUよりも旧約・新約図像を用いた絵画化が目立つ。旧約 (57) は、創世記 (5)、出エジプト記 (28)、ダヴィデ (22)、預言者 (2) の4つに分類できる。また主題選択について、他の詩篇などとの比較から、Uと共通するもの (13)、余白挿絵の伝統によるもの (37)、Uと余白双方によるもの (1) S独自のもの (6) に大別できる⁵⁵。

創世記は、S独自のものが目立つ。38篇10節「あなたが私をつくって下さったとき」に対し、人間の創造を見守る預言者が描かれている (f.50v)⁵⁶。一方104篇17節「奴隷として売られたヨセフ」には、ラクダを引いた奴隷商人に売られるヨセフが描かれている (f.119)⁵⁷。前者は他のリテラルな詩篇に見られない主題選択であるが、後者はビザンティン余白挿絵詩篇と一致している。モーセが登

場する頻度は高く、その大半が余白挿絵詩篇と共通している。77篇、104篇～105篇は、長い本文に出エジプト記のエピソードを要約している。104篇27節「ハムの地で奇跡を行い」に対し、魔法の杖を受け取るモーセとアロンが描かれている(f.119v, 図5)⁵⁸。この主題はビザンティン余白挿絵の『ハミルトン詩篇』(ベルリン, 国立図書館, KSK 78 A9) のみに見出される。しかしカロリング朝大型聖書を代表する『サン・パオロの聖書』(ローマ, サン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ修道院) 出エジプト記第一扉絵(f.21v)に、この「杖の奇蹟」が登場する。86篇4節「ラハブとバビロンの名を、私を知る者の名を共に挙げよう」は、画面左側の都市にヨシュアのスパイをかくまうラハブと呼応している(f.102r)⁵⁹。Uを始め他の詩篇挿絵に、ラハブは登場しない。しかし『サン・パオロの聖書』ヨシュア記扉絵(f.59v)には、ラハブの救済が描かれている。ダヴィデ伝の大半は詩篇タイトルに基づく。3篇タイトル「ダヴィデがその子アブサロムを逃れたとき」は、アブサロムから逃走するダヴィデによって絵画化されている(f.3v)⁶⁰。この主題は、余白挿絵や12世紀のUのコピー『エドウィン詩篇』(ケンブリッジ, トリニティ・カレッジ, R. 17. I) に見出される。一方29篇タイトル「神殿奉献の歌」は、扉口に蠟燭の灯った神の家に集まるダヴィデと信徒に対応している(f.36r)⁶¹。この章句は、他の詩篇挿絵には絵画化されていない。預言者の事例は非常に僅かである。129篇1節「深い淵の底から」を絵画化したヨナ(f.147v)は、13世紀以降、物語イニシャルの主題として定着する⁶²。以上、旧約主題はSのレパートリーを明らかにし、稚拙な印象とは裏腹に、図像の伝統を受け継いでいることを確認した。また段落式挿絵形式によって、絵画化するテキスト選択が柔軟であることも、多様な主題を生み出す要因であったと考えられる。

新約(33)は、Sのみに見出される事例(9)、Uと共通(9)、余白挿絵と共通(13)、両者と共通(2)である。6篇9節「悪を行う者よ、皆私を離れよ」に対し、羊と山羊を分けるキリストが描かれている(f.6v)⁶³。この図像は最後の審判を象徴的に表す。ここでは右側に逃げ去る黒い悪魔が、

主題の意味を明らかにしている。87篇7節「あなたは地の底の穴に私を置かれます」は、磔刑のキリストと近づく悪魔に呼応している(f.102v)⁶⁴。悪魔は「暗闇」すなわち死を暗示するのであろう。Uでは墓の中から訴えかける詩篇作者が描かれていた。40篇10節「私のパンを食べる者が私を裏切る」は、ユダにパンの小片を与えるキリストに呼応する(f.53r, 図6)⁶⁵。ユダの口にはカラス型の悪魔が入る様子が描写されている。キリストを売り渡す裏切りの要因が、明快に呈示されている。84篇11節「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし」は、Uや余白挿絵詩篇と同じように抱擁する2人の女性に対応している(f.100v下)⁶⁶。Uは美徳の擬人像のニュアンスが強いが、余白挿絵は「聖母のエリザベツ訪問」をあらわしている。Sの女性像は後者に近いが、章句に即した擬人像の性格も失われてはいない。

Sの旧約・新約主題は、一方でテクスチュアルな詩篇挿絵の伝統に位置づけられ、他方で独自のセンスで章句と図像を組み合わせている。その根底にあるのは、挿絵を見る者の視線を挑発し、詩篇の章句を喚起させる企てであろう。それは史伝的図像の援用のみならず、これまで見てきた多彩で少々強引なイメージ変換全体に共通していると考えられる。

おわりに

本稿は、これまで本格的に分析されなかったS挿絵のリテラリズムの解明に着手した。Sが段落形式であり、一挿絵に描きこめる要素は少ないが、長いテキストに複数の挿絵を充てた対応と、逆に複雑な文脈から要点を抽出した絵画化を、Uとの差異の要因として念頭に置くのは、分析に取り組む前提となるだろう。またやや稚拙な様式に惑わされず、レパートリーの多様さに注意すると、Sが継承した伝統を意図的に選択して配列していることが伺われる。作品の制作意図や受容者など、早急に解明できる課題ではないが、今回、その手がかりの輪郭に少しふれたように思われる。今後も、引き続き検討を重ね、西欧中世詩篇挿絵の特質に光を当てていきたい。

- 1 DE WALD, E. T. *The Stuttgart Psalter. Biblia folio 23, Württembergische Landesbibliothek Stuttgart*, Princeton, 1930, *Der Stuttgarter Bilderpsalter. Bibl. Fol. 23, Württembergische Landesbibliothek Stuttgart*. Eds. B. Bischoff et al. Stuttgart 1965-1968. 2 vol, MEYER, H., Metaphern des Psaltertextes in den Illustrationen des Stuttgarter Bilderpsalters, *Aspekte des Zusammenwirkens zweiter Kunst in Mittelalter und früher Neuzeit. Festschrift Friedrich Ohly*, Wiesbaden, 1980, pp. 175-208, 抽稿, 「擬人像表現, 或いは比喩の絵画化に現れた詩篇挿絵の相貌—シュトゥットガルト詩篇に関する覚え書き(その一)—」, 『名古屋短期大学研究紀要』, 第28号, 1990, pp.187-210.
- 2 DE WALD, E. T., *The Illustrations of the Utrecht Psalter*. Princeton 1932 (Illuminated manuscript of the middle ages 3), DUFRENNE, S., *Tableaux synopdques de 15psautiers médiévaux à illustrations intégrales issues du texte*. Paris, 1978 (以下T.S.). Idem, *Les illustrations du Psautier d'Utrecht. Sources et apport carolingien*. Paris 1978 (association des publications près les Université de Strasbourg 161, 以下Psautier), *Utrecht Psalter. Vollständige Faksimile-Ausgabe im Originalformat der Handschrift 32 aus dem Besitz der Bibliothek der Rijksuniversiteit Utrecht*. Kommentar K. van der Horst & J. H. A. Engelbrecht. Graz 1984 [Codices selecti 75], 2 vols. van der HORST, K., et al. *The Utrecht Psalter in Medieval Art: Picturing the Psalms of David*, Utrecht / London, 1996.
- 3 RIESCH, H., Quod multis in hostem habeat baculum sed arcum. : Pfeil und Bogen als Beispiele für technologische Innovationen der Karolingerzeit, *Technikgeschichte* 61, 1994, pp.209-226, esp. pp.213-215. Uの画面構造について, 抽稿, 「ユトレヒト詩篇挿絵の構図をめぐる問題の現状と今後の展望—ユトレヒト詩篇研究(その三)—」, 『美学美術史研究論集』, 第13号, 1995, pp.15-32.
- 4 辻 佐保子, 「詩篇挿絵における「偶像」表現の役割—『ユトレヒト詩篇』を中心に—」, 『美学美術史研究論集』, 第15号, 1998, pp.1-26
- 5 TRAVIS, W. Representing >>Christ as Giant<< in Early Medieval Art, *Zeitschrift für Kunstgeschichte* 62, 1999, pp.167-189. キリストの巨大なスケールの起源を, 18篇6節の註解に探り, 図像表現と対照した。18篇はテキスト区分と無関係なので事例が非常に少なく, 6節の絵画化はSとU及びそのコピーのみである。
- 6 抽稿, 「ユトレヒト詩篇挿絵における言葉から映像への変換」, 『美学美術史研究論集』, 第2号, 1983, pp.31-64. デュフレンヌが整理した54の同義語リスト (Psautier, pp.46-52, n.119-156, pp.57-60, n.173-178, 182-190)のうちSに該当例があるものを抽出, 整理した。また一覧表をもとに検討例を拡充した。
- 7 観察結果を表にまとめた。

| | 語句 | 文脈 | 連想 | 定式 | 計 |
|-----|----|-----|----|----|-----|
| 正義 | 15 | 63 | 41 | 13 | 132 |
| 悪 | 1 | 24 | 29 | 7 | 61 |
| 自然 | 14 | 15 | 7 | 10 | 46 |
| 人工物 | 2 | 22 | 19 | 3 | 46 |
| 計 | 32 | 124 | 96 | 33 | 285 |

- 8 Stuttgart, pp.80, 85, T.S., Ps.28, 36.
- 9 Stuttgart, pp.118-119. T. S. Ps.86.
- 10 抽稿 1983, 34-36頁。
- 11 Stuttgart, p.115, T. S. Ps.78.
- 12 Stuttgart, p.75, T. S., Ps.21.
- 13 Stuttgart, p.116, T. S, Ps.80.
- 14 Stuttgart, p.91, T. S., Ps.44.
- 15 Stuttgart, p.149, T.S., Ps.149.
- 16 Stuttgart, p.86, T. S., Ps.36.
- 17 Stuttgart, p.71, T. S., Ps.17.
- 18 Stuttgart, p.94, T. S., Ps.49.
- 19 Stuttgart, p.101, T.S., Ps.62.
- 20 Stuttgart, p.126, T. S., Ps.103.
- 21 Stuttgart, pp.74-75, T. S., Ps.21.
- 22 Stuttgart, p.67, T. S., Ps.10.
- 23 Stuttgart, p.92, T. S. Ps.45.
- 24 Stuttgart, p.110. T.S. Ps.75. 古代戦勝記念美術の伝統との関連は, 特に言及されていない。

- 25 Stuttgart, p.105, T.S. Ps.68.
 26 拙稿 1983, 36-38頁。
 27 Stuttgart, p.97, T. S., Ps.54.
 28 Stuttgart, p.135, T. S., Ps.118.
 29 Stuttgart, p.1134, T. S., ps.118.
 30 Psautier, pl.77, La Main divine. 神の手の行為は祝福が大半であるが、20篇と「モーセの第1の歌」では槍を投げている。
 31 Stuttgart, pp.120, 133, T. S., Pss.89, 114.
 32 Stuttgart, p131, T.S., Ps.109.
 33 KANTROWICZ, E. H., The Quinity of Winchester, *The art Bulletin* 9 (1947), pp.73-85, KIDD, J., 'The Quinity of Winchester reconsidered, *Studies in iconography* 7-8 (1981), pp.21-33, BOESPFLUG, F. & ZALUSKA, Y., Le dogme trinitaire et l'éssor de son iconographie en occident de l'époque carolingienne au IVE Concile du Lateran (1215), *Cahiers de civilisation médiévale* 37 (1994), pp.181-240, RAW, B. C., *Trinity and incarnation in Anglo-Saxon art and thought*, (Cambridge studies in Anglo-Saxon England 21), Cambridge, 1997.
 34 Stuttgart, p.136, T. S., Ps.118.
 35 Stuttgart, p.61, T. S., Ps.4.
 36 Stuttgart, p.145, T. S., Ps.139.
 37 Stuttgart, p.145, T. S., Ps.140.
 38 Stuttgart, p.98, T. S., Ps.56.
 39 Stuttgart, p.143, T. S., Ps.134.
 40 Stuttgart, p.99, T. S., Ps.51.
 41 中世からルネサンスの性的暴力表現をめぐる、近年、関心が高まっている。WOLFFTHAL, D., *Image of Rape: The Heroic Tradition*, Cambridge, 1999, 若桑 みどり, 『象徴としての女性像：ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』, 筑摩書房, 2000年。
 42 Stuttgart, p.136, T. S., Ps.118.
 43 Stuttgart, p.109, T. S., Ps.72.
 44 Stuttgart, p.115, T. S., Ps.77. サミュエル書との関連は、エウゼビウス、アウグスティヌスなど諸教父の解釈に基づく。
 45 Stuttgart, pp.63-64, T. S., Ps.8.
 46 Stuttgart, p.130, T. S., Ps.107.

- 47 Stuttgart, p.142, T. S., Ps.131.
 48 Stuttgart, p.68, T. S., Ps.14.
 49 Stuttgart, p.97, T. S., Ps.55.
 50 Stuttgart, p.71, T. S., Ps.17.
 51 Stuttgart, pp.65-66
 52 Stuttgart, pp.73-74.
 53 Stuttgart, p.76, T. S., Ps.22.
 54 Stuttgart, p.147, T. S., Ps.143.
 55 旧約主題

| 旧約 | ユニーク | cf.U | cf.余白系 | 余白とU | 計 |
|------|------|------|--------|------|----|
| 創世記 | 4 | 0 | 1 | 0 | 5 |
| モーセ | 2 | 3 | 22 | 1 | 28 |
| ダヴィデ | 0 | 8 | 14 | 0 | 22 |
| 預言者他 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 計 | 6 | 13 | 37 | 1 | 57 |

- 56 Stuttgart, p.87, T. S., Ps.38. 古ラテン語訳に基づく。
 57 Stuttgart, p.127, T. S., Ps.104.
 58 Stuttgart, p.127, T. S., Ps.104.
 59 Stuttgart, pp.118-119, T. S., Ps.86.
 60 Stuttgart, p.60, T.S., Ps.3.
 61 Stuttgart, pp.80-81, T. S., Ps.29.
 62 Stuttgart, pp.141-142, T. S., Ps.129, 13世紀物語イニシャル入り詩篇挿絵について, PETERSON, E., *Iconography of the Historiated Psalm initials in the thirteenth century French fully illustrated Psalter Group*, (Ph. D. University of Pittsburgh), 1991.
 63 Stuttgart, p.p.63, T. S., Ps.6. cf. ラヴェンナ, サンタポリナレ・ヌオーヴォ身廊部モザイク。
 64 Stuttgart, p.119, T.S., Ps.87.
 65 Stuttgart, p.89, T. S. PS.40.
 66 Stuttgart, p.118, T. S., Ps.84, 拙稿, 「比喩の映像化と擬人像の役割をめぐる一考察—ユトレヒト詩篇研究(その二)—」, 『美学美術史研究論集』, 第4号, 1986, pp.132-164特に146-150。

附記 本稿は平成11~13年度科学研究費 基盤研究(C)による成果の一部である。



図1 『シュトゥットガルト詩篇』, 75篇4節 (f.88r)



図2 同, 51篇3-4節 (f.64v)



図3 同, 77篇66節 (f.94v下)



图4 同, 55篇7节 (f.68r)



图5 同104篇26~27, 30~32节 (f.119v)



图6 同, 40篇10节 (f.53r)